「れっきょうきょう」に参加して

れっきょうきょうは「歴教協」歴史教育者協議会の略称です。歴史や社会科に関わる教師や市民・研究者が全国から集う勉強会。今年は 8 月上旬、大阪関西大学で 700 人ぐらいが集まり、24 の分科会で討論しました。私は「現代の課題と教育」という分科会に出ました。

東北大震災で被災した子どもたちと映画作りを通して復興と継承を考える人、フクシマで高校生とそこで生きながら原発事故を考える人、「放射能の知」は今や子どもたちの生きる基礎学力と訴える人と 3.11 後をどう生き、どう伝えるか話し合いました。私にとって一番強烈だったのはフクシマの高校生の認識でした。（高校生だけでなくフクシマに生きる人々の思いでもあるのでしょうが…）

フクシマにいながら、再稼働を支持する高校生がいる

彼らの中に「怒り」は確実にあるのに、フクシマに住むと決めたことの特殊性（限界性）とも言うのでしょうか、「もう触れないでほしい」という雰囲気、声を上げることの難しさ、原発を職場にしたりそれで生活したりした人もいてタブー視されていることもあると言う。感じ方は多様だという。他に住んで無関心な人は別として、フクシマに住んでどう考えているのだろうかと思ってきた私にこの現実は新しい問いをつくり出しました。フクシマのＦさんは「いかに現実を実感させていくか、ミナマタにも学びたい」とも言われました。

そうかあ。四日市の磯津の中にいても、公害や企業に対する考え方は様々。公害発生企業に対する思いさえいろいろ。被害に苦しむ患者への目だってねたみや非難も 40 年経ったいまだにある。みんなが同情や共感じゃない。

どうしてこの国はこんな悲しい、バラバラの考え方になったのだろうか。

それ（住民の感情）を読み解いて、カネで意図的にさらに分断をつくり出す輩もいる。残ったこと残らざるを得ない人を応援するかのように「逃げた奴」と亀裂を入れる人もいる。意図的で無くてもそう思わせる何かがある。

事故から 2 年 5 ヶ月。現実は汚染地帯で暮らす子どもたちの健康被害と自分自身の健康を守る自由すら確立できず不安の中で暮らす親や子どもたちは多いはずです。当の子どもたちが何を見つめ、何を考えているのかに寄り添い、共に考えていくのは容易ではありませんが、正にフクシマに生きると決めたからには「私たちの現代の課題」でもあります。

少しでも安全な生活と食、被害と補償要求の権利、国や加害企業の責任追求、フクシマに住む子どもたちの心のケア等と新しい問題はありますが、今までの公害がもたらした環境・人間・生活の破壊の中で分断されてきた私たちの課題を解決することとよく似た構造を持っているのだと思えてきたのです。